

Drag & Drop UpTeX

1. Drag & Drop UpTeXについて

Drag & Drop UpTeXは、10.10 yoemite以降のmacOSに、なるべくコンパクトな日本語TeX処理系を導入するための統合パッケージです。任意の場所にDrag & Dropでインストールでき、最低限の操作で必要な設定が完了します。

またアプリケーションは、TeXソースをエディタで編集・タイプセットし結果をPDFビューワで表示する統合環境機能と、内蔵TeX環境のアップデートやパッケージの追加・削除などを行う管理機能を備えています。例えるならTeXShop・TeX Live Utilityそれぞれの簡略版と、TeX Liveの軽量版 (scheme-small+collection-langjapanese+α) を一体化したようなものです。

なおこのReadMeファイルは、UpTeX.appの「ヘルプ」メニューの「UpTeX ReadMe」からも開くことができます。

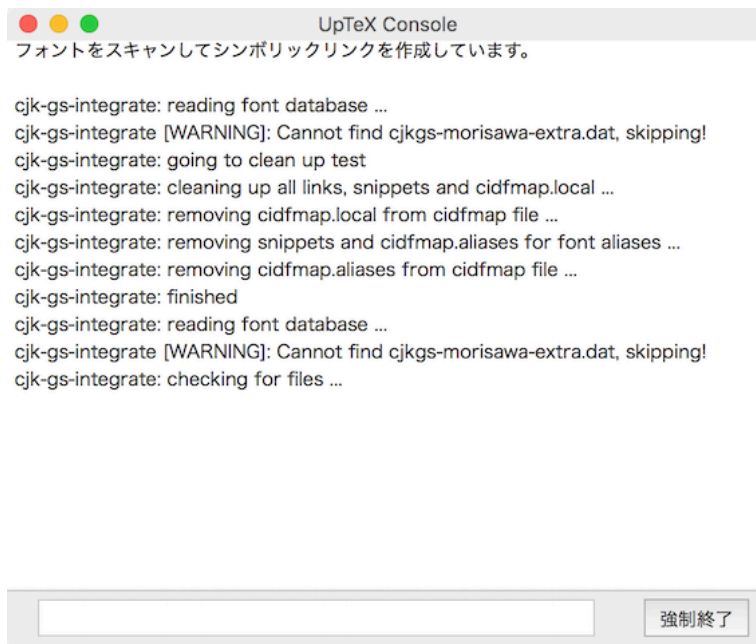


2.使い方

(1) インストール

UpTeX.appを、アプリケーション・フォルダなどの任意の場所にコピーしたら、ダブルクリックして起動してください。

* ダブルクリックしても警告が出て起動できない場合は、UpTeX.appをファイндаで選択し、右クリック (ctl+クリック/二本指クリック) で出るメニューから「開く」を選び、表示されたパネルの「開く」ボタンをクリックして起動してください。次からは、ふつうにダブルクリックで起動できます。



初回起動時には、コンソールウィンドウが立ち上がり、システムフォントをスキャンして、macOSのバージョンに応じて、dvipdfmx用に適切になるよう、TeX環境内にフォントのシンボリックリンクが作成されます。これは、`cjk-gs-integrate --output=test --link-texmf --cleanup` と `cjk-gs-integrate-macos --output=test --link-texmf` を実行し、その結果、UpTeX.app内部にできる不要ファイルを削除したうえで、`mktexlsr` を実行しています。

なお、コンソールウィンドウ下側のテキスト入力欄は、実行しているコマンドから返答の入力を求められた場合のためのものです。たとえば、TeXソースの処理中に、スタイルファイルが見つからないと、そのパスの入力を求められたりしますが、そのようなときに使います。リターンキーで入力確定です。「強制終了」ボタンは、進行中の処理を強制終了します。

続いて、「UpTeX」メニューから「環境設定」パネルを開き、「dvipdfmxのフォント」のプルダウンメニューで、dvipdfmxで使うフォントの設定をしてください。コンソールウィンドウに処理が渡されて、`kanji-config-updmap-sys --jis2004` を実行します。通常は、各macOSバージョン用のヒラギノNを選ぶとよいでしょう。違うバージョンのOSのものや、システムにないフォントを選んだ場合は、代わりに他の適当なフォントが動的に選ばれます。なお、この作業は、UpTeX.appの上書きアップデートの場合にも、最初に必ずしておいてください。環境設定パネルには以前の設定が引き継がれて表示されていても、新しいUpTeX.appの内部では、まだ設定がされていない状態になっているからです。

(2) 環境設定パネルについて

dvipdfmxのフォント

先述の通り。

texbinパスをクリップボードにコピー

UpTeX.app内部のTeX環境のtexbinパスをクリップボードにコピーします。.bash_profileなどでのPATHの設定や、TeXShopなど他のアプリケーションでの設定に用います。UpTeX.appをアプリケーション・フォルダにインストールした場合は、

```
/Applications/UpTeX.app/Contents/  
Resources/TEX/texbin
```

となります。

内蔵エディタの初期設定フォント

TeXソースファイル編集用の内蔵エディタの表示フォントを設定します。「変更」ボタンをクリックすると、フォントパネルが開くので、それで設定します。

パッケージの管理

ボタンをクリックすると、「パッケージ管理」ウィンドウが立ちあがります。

フォントの再サーチ・リンク

初回起動時に自動で行われるシステムフォントのサーチとシンボリックリンクの作成を手動で再実行します。UpTeX.appがインストールされた環境を、たとえば、SierraからHigh Sierraに上書きアップデートしたような場合や、TeXで使用可能なフォントをシステムにインストールした場合などに利用します。

起動時にTeXをアップデート

チェックボックスがオンになっていると、UpTeX.appを起動するたびに、まずコンソールウィンドウが立ちあがって、内蔵TeX環境のアップデートを自動で行います。デフォルトではオフになっています。

PDFをTEXファイルと同時に開く

チェックボックスがオンになっていると、内蔵エディタでTeXソースファイルを開く際、同じフォルダにソースと対応するPDFがあれば、セットで開きます。デフォルトではオフになっています。

レトロ風コンソール

チェックボックスがオンになっていると、コンソールが昔のモノクロモニタのような黒バック・緑文字のデザインになります。デフォルトではオフになっています。



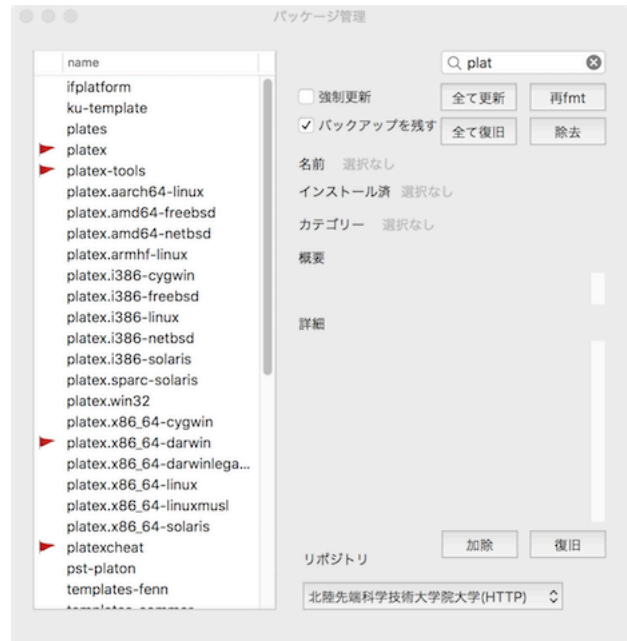
(3)パッケージ管理ウィンドウについて

a.パッケージ管理全体に関わるもの

環境設定パネルからパッケージ管理ウィンドウを起ちあげると、TeX Liveの全パッケージの情報を取得したうえでウィンドウを表示します。このプロセスはパッケージ数が膨大なため、若干の時間がかかります。なお、インストール済パッケージには、“旗”が表示されます。

「全て更新」ボタン

インストールされている全パッケージについて、アップデートを行います。処理過程はコンソールウィンドウに表示されます。`tlmgr update --self`と、`tlmgr update`を実行します。



「強制更新」チェックボックス

`tlmgr`でのアップデートでは、取得すべきファイルが置かれているミラーサイトで当該ファイルの更新中であった場合などにファイル取得に失敗して、そのパッケージが削除され、以降 `skipping forcibly removed package <package_name>`

というメッセージが出るようになることがあります。その場合、`--reinstall-forcibly-removed`オプションをつけて実行することで、当該パッケージを回復できます。「強制更新」はそのためのもので、チェックボックスがオンの場合、こちらが実行されます。デフォルトではオフになっています。なお起動時の実行は、オプションなしで固定です。

「バックアップを残す」チェックボックス

オンになっていると、アップデートの際、アップデートで問題が生じた場合に前のバージョンに復旧するためのバックアップを1回分残します。デフォルトではオンになっていますが、バックアップの蓄積はファイルサイズを大きくします。

「全て復旧」ボタン

TeX環境全体をすべてのバックアップから復旧します。コンソールウィンドウに処理が渡されます。`tlmgr`が、本当に復旧するかユーザーに問うてくるので、テキスト入力欄で `y` を入力して処理を続行してください。

「除去」ボタン

全バックアップ・ファイルを削除します。「バックアップを残す」を解除したうえで実行します。

「再fmt」ボタン

全復旧・個別復旧を問わず、復旧後には`platex/uplatex`のフォーマットファイルの再作成が必要になることがあります。それをこのボタンで実行します。

b.個別のパッケージ管理に関わるもの

「加除」ボタン

リストで選択されているパッケージについて、未導入であればインストールし、導入済であればアンインストールします。変更結果は即座にリストに反映します。ただし、インクリメンタル・サーチをしていた場合、その絞り込み結果はリセットされて、あらためて全リストが表示されます。

「復旧」ボタン

リストで選択されているパッケージについて、バックアップから復旧します。コンソールウィンドウに処理が渡されます。`tlmgr`が、本当に復旧するかユーザーに問うてくるので、テキスト入力欄で `y` を入力して処理を続行してください。

c.リポジトリ選択に関わるもの

「リポジトリ」プルダウンメニュー

ファイルのダウンロードに用いるリポジトリを設定します。デフォルトでは`jaist/「北陸先端科学技術大学院大学(HTTP)」`になっています。「CTANミラーサーバ(動的)」は、近くのミラーサイトを動的に探すものですが、私の環境では`UpTeX.app`での動作は不安定でした。「TeX Users Group」は本家サイトですが、アクセス集中を避けるため、通常は使いません。まだアップデートが各ミラーサイトに回り切る前に、いち早くアップデートが必要な場合など、特殊な条件のためのものです。

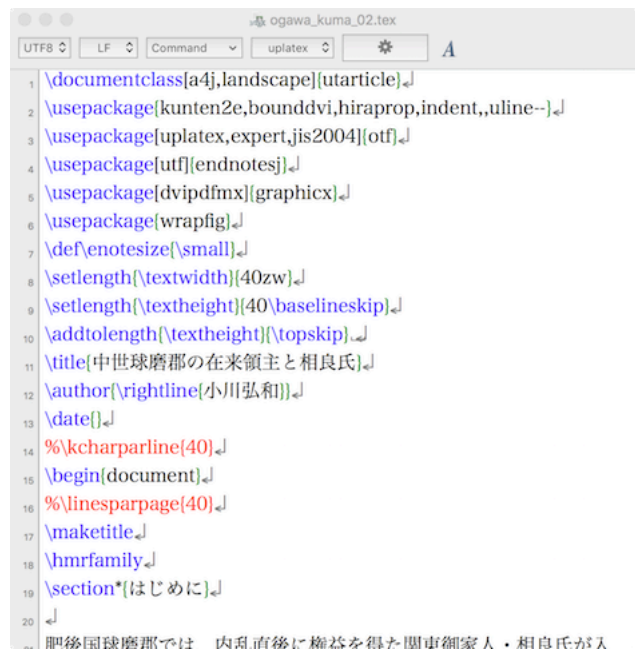
(4) 内蔵エディタについて

文字コード・改行コード自動判別機能とTeXコマンドカラーリング機能などをもったテキストエディタです。操作のためのプルダウンメニューとボタンは、ウィンドウ上部の枠に集中しています。

基本的な機能

いちばん左には、開いたファイルの文字コード・改行コードを判別して表示します。また、このプルダウンメニューを操作して、保存の際のコード変更をします。

「command」メニューの説明は後として、次のプルダウンメニューでは、ファイルの拡張子から、処理実行の際のコマンドを判別・表示します。`.tex`なら内容判別のうえで`uplatex/platex`のどちらか。`.aux`なら`upbibtex`、`.idx`なら`upmendex`とみなします。それ以外であ



```
ogawa_kuma_02.tex
UTF8 LF Command uplatex * A
1 \documentclass[a4j,landscape]{utarticle}
2 \usepackage[kunten2e,bounddvi,hiraprop,indent,,uline-]
3 \usepackage[uplatex,expert,jis2004]{otf}
4 \usepackage[utf]{endnotes}
5 \usepackage[dvipdfmx]{graphicx}
6 \usepackage[wrapfig]
7 \def\enotesize{\small}
8 \setlength{\textwidth}{40zw}
9 \setlength{\textheight}{40\baselineskip}
10 \addtolength{\textheight}{\topskip}
11 \title{中世球磨郡の在来領主と相良氏}
12 \author{\rightline{小川弘和}}
13 \date{}
14 %\kcharparline{40}
15 \begin{document}
16 %\linesparpage{40}
17 \maketitle
18 \hmrfamily
19 \section*{はじめに}
20
```

職務団長座席では 内閣府に権限を得た閣内閣家人・相良氏が入

ればotherとして、コマンド実行ボタンを押しても何の処理もしません。判別に失敗している場合や、必要に応じて、プルダウンメニューからコマンドを選びなおしてください。

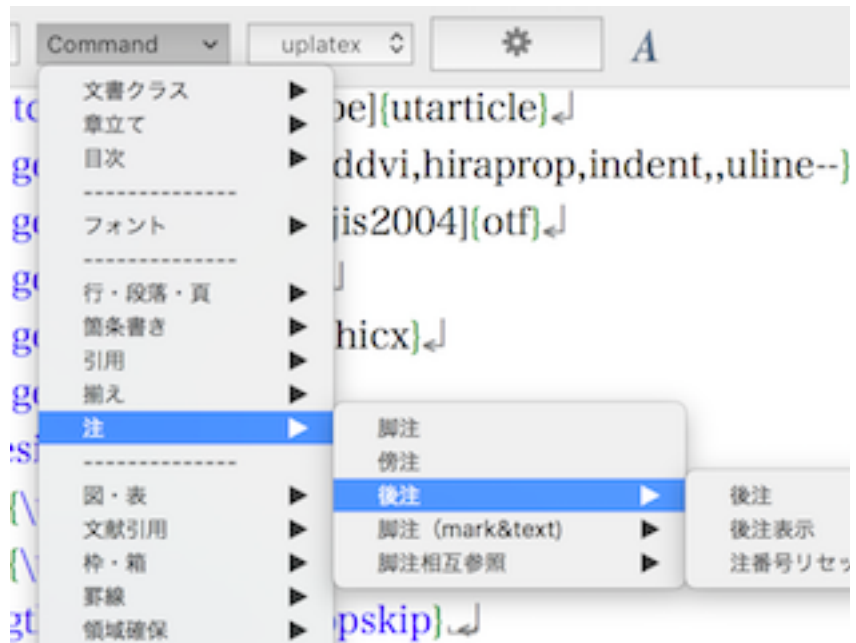
その右側のボタンは、「command」メニューでの選択にしたがって、処理コマンドを実行するためのボタンです。この機能にはキーボード・ショートカットとして“⌘+Y”を割り当ててあります。処理過程はコンソールウィンドウに表示されます。必要に応じてテキスト入力欄で応答してください。uplatex/platexの実行では、dvi/dvipsまで連続実行したうえで、生成されたPDFを内蔵PDFビューワで開き、表示します。

「A」ボタンはフォントパネルを開いて、当該ファイルの表示フォントを変更します。これは初期設定とは連動しません。

コマンド入力支援機能

「コマンド」プルダウンメニューは、TeXShopの「マクロ」プルダウンメニューと類似の機能で、デフォルトでは、初期のTeXShopに搭載されていた、拙作のものとはほぼ同等のコマンド一覧を提供するものになっています。

しかし、この種の機能にはカスタマイズの余地が必要ですから、TeXShopのものの仕様を踏襲してあります。具体的には、コマンド一覧のプロパティリストをアプリケーションが読み込



むようになっており、それは `com.dokuroryokan.UpTeX.command.plist` というファイル名で、ユーザーの `Library/Preferences` フォルダに置かれます。UpTeX.appは、初回起動時に内蔵したプロパティリストを、この場所にコピーします。よってたとえば、TeXShopの `Macros_Latex.plist` をコピーし、上記ファイル名で `Library/Preferences` に置いておけば、UpTeX.appはそれを読み込みます。ただしTeXShopのマクロには、TeXShop固有の機能と呼ぶものが多く含まれており、それらは当然、UpTeX.appでは使用できません。そこで `Macros_Latex.plist` のバックアップを取ったうえで、TeXShopのマクロエディタや、他のプロパティリスト編集ソフトで編集し、あるいは `com.dokuroryokan.UpTeX.command.plist` をコピーして、同じように編集してカスタマイズするとよいでしょう。

(5) 内蔵PDFビューワについて

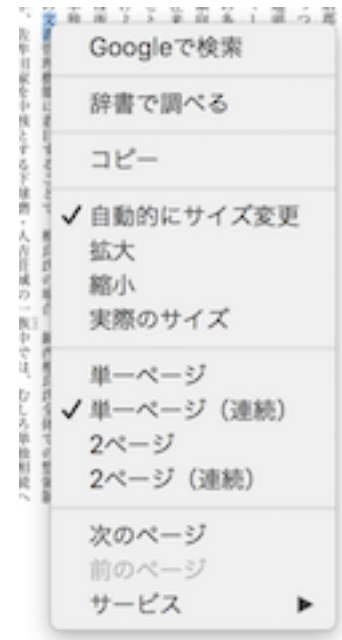
タイプセット結果の表示に特化した、シンプルなPDFビューワです。タイプセットのたびに、表示ページをほぼ維持しつつ、表示内容を更新します。ページの表示方式の変更などは、下図のように、画面の右クリック (ctl+クリック/二本指クリック) で表示されるメニューで行います。

(6) SyncTeX

UpTeX.appの内蔵エディタとPDFビューワはSyncTeXに対応しています。画面の⌘+クリックで、PDFビューワからはエディタに飛んで当該行を選択表示 (inverse search)。エディタからはPDFの当該ページに飛んで表示します (forward search)。ただしforward searchは内部の処理を単純化して実装しているため、当該行が複数ページに跨がっている場合には、その最後のページに飛んでしまうなど、精密なものではありません。

(7) 独自のスタイルファイルなどの追加について

UpTeX.appの内蔵TEX環境は、TeX Liveに含まれていないような独自ファイルは、ユーザーの Library/Preferences 内に texmf フォルダを作って、そこに置けるように設定されています。アプリケーション・バンドル内の TEX フォルダ内は、tlmgrによって管理されているので、ファイル加除などの直接の変更をしないでください。



3. 本パッケージのJMacro部分を構成する内容と諸権利

(1) kunte2e.sty

大阪大学の金水敏氏 (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/tex/top.htm>) が作成・公開されているルビ・割注等作成用マクロ。その権利は金水氏に属するものであり、再配布にあたっては金水氏より許諾をいただいております。

(2) hiraprop

OTF/UTFパッケージの作者でもある齋藤修三郎氏 (<http://psitau.kitunebi.com/>) が作成された、ヒラギノ従属欧文フォントを使用するためのパッケージ。再配布にあたっては齋藤氏の許諾をいただいております。

(3) ulineー.sty

吉永徹美氏が作成された、縦組で利用でき行分割可能な傍線などを引くことができるマクロ。一次配布サイトは閉鎖されてしまいましたが、ソース内のコメントによれば、改変しなければ再配布可とのことですので、20180522版から同梱することにしました。

* 拙作の和文縦組用後注作成パッケージ `endnotesj.sty` は、山下弘展 (Acetaminophen) 氏によるv3.0への改良のうえ、CTAN/TeX Liveに取り込まれ、`collection-langjapanese` の標準配布物に含まれました。

5.免責事項

UpTeX.appは無償で提供されますが、あくまで無保証であり、その導入・使用によって生じ得る如何なる事態に対しても、作成者およびその包含物の一次作成者は、一切の責任を負わないものとします。その将来にわたるバージョン・アップやサポートを約束するものでもありません。また、再配布や改変物配布についても、それぞれの一次作成者が定める条件に従うこととなります。以上に同意のうえにご利用下さい。

なお、UpTeX.appの固有部分は、殆どが一般的なサンプルコードやTeXShopのコードなどを参考にしたものであり、特段の独自権利を主張するものではありません。ソースコードも、大したものではありませんが、ファイル・サイズの大きいTEX環境を除いたものを、同梱しておきます。

6.更新履歴

2018年5月27日

platexで日本語のファイル名が通らない問題に対処した。ただし原因はplatexの方にあるため、コンソール表示の日本語が文字化けするなど対症療法で、またTeXファイル内で別の日本語名TeXファイルをinputしている場合などには対処できていない。

2018年5月26日

レトロ風コンソールのデザインを選べるようにした。

2018年5月25日

パッケージ管理機能のバグを修正し、また、その使い勝手を改善した。

2018年5月22日

TeX Live 2018にendnotesj.sty (v3.0) が取り込まれたのを踏まえて、独自追加を取りやめ、併せて、パッケージ管理機能とPDFビューワ・コンソールウィンドウを備えた、TeXのための完結した環境としてUpTeX.appを大規模改修した、新版となった。

小川弘和

herogw@kumagaku.ac.jp

dokuroishi@icloud.com

<http://www2.kumagaku.ac.jp/teacher/herogw/index.html>